

2016年度 日教組平和集会

10月1・2日、福岡県で約170人（高教組4名）が参加して開催されました。

現地報告でバンドグループ「未来座」が「事実をつかむ、現実を語り継ぐ」をモットーに人権・平和コンサートが行われ、30年来平和と真逆な未知をひた走る日本への警鐘を鳴らし続ける詩が披露されました。特別報告は「憲法の上位にある『安保・日米地位協定』」と題して、沖縄県教組山本委員長から沖縄をめぐる現状について報告がありました。

「戦後補償や国際連帯のとりくみ」分科会では、徳島県教組書記局襲撃事件裁判闘争の報告、被爆二世教職員の会がとりくんだ中国人強制連行の遺族捜しと三菱マテリアルとの和解実現までのとりくみの報告をもとに、排外主義などの差別の克服に向けたとりくみや戦争被害者に対する国家・企業の責任による謝罪と補償の実現に向けたとりくみが議論されました。「平和を進める運動・教育」分科会では、被爆二世教職員のとりくみや兵庫、愛知、広島での平和教育の実践をもとに議論されました。

フィールドワークは、大刀洗空襲・陸軍飛行場遺構、飯塚市朝鮮人炭鉱労働者慰霊施設等を視察しました。



2016年 日教組平和集会を終えて

平和集会を終えて、強く感じたことが2つあります。

1つ目は、危機感です。戦争の風化が、予想外に加速して進んでいることの実感を思い知らされました。戦後71年、戦争体験者は減少し、（学校現場でも）平和教育どころか、原爆投下日を知らない子どもや教師が増えているようです。しかも、被爆地で、衝撃を受けると同時に、風化が加速する環境をつくってしまっている焦燥感も感じました。

2つ目は、大人のフィールドワークの大切さです。「百聞は一見にしかず」改めて実感しました。炭鉱労働者の無縁墓地や筑豊の二本煙突を体感したことにより、今まで知ることのなかった事実に分れることができました。教科書では知ることのなかった事実を知ることができました。日本人だけではない、異国の方々の犠牲に成り立った炭鉱であったこと、その異国の方々は、お墓すら建ててもらえていなかったこと。このことが、歴史を学ぶということなのかもしれません。

久慈拓陽支援分会 石川 恵美